

聴く力

大阪教育大学 島崎 英夫

今年は教育実習も例年の九月には終わらず、十月・十一月まで続きました。十日ほどしかなかった夏休みのあと、疲れがたまり続ける過密な日々にもかかわらず、学生たちを一人前にするために助力いただいた各学校の先生方に深謝申し上げます。

実習から帰ってきた学生たちに感想を尋ねると、良かったことの第一は、教員の魅力を再確認できたこと。難しかったことの第一は、人を叱ること、でした。私語を注意したのに止まないの、怒り心頭に発して、それ以降の授業がメタメタになってしまったという学生もいました。

本当に、怒ったら負けです。私語する児童生徒学生がいるのは、前でしゃべっている教員の言葉も「私語」としか彼らには届いていないからで、聞かなければ損をするくらいの面白い中身を、教室内は「公の場」であることを意識させながら、互いの思いをやりとりしないと授業は成立しません。わたしも四十年以上、人前で話をしてきて、さすがに私語に悩まされることはありませんが、実は授業をしていて一番厄介なのは、聞き手たちの反応が乏しかったり、なかったり、することです。

文科省は「主体的で、対話的で、深い学び」をこれからの学校がめざすものとして標榜していますが、対話相手が「自分の思っていることを話す」ことがなければ事は始まりません。問答以前の沈黙には、ソクラテスであっても対処のしようがないのです。けれども、わたし自身の経験から言えることは、人は必ず話す事柄を抱えている……ただし、それが打ち明けられるのは、それを聴こうとする者に対してだけだということです。そして大切なのは、「自分のうちにある声」に気づかせることです。

「聴く力」が求められるのは教師だけではありません。人が二人以上いる場で、リーダーになる人には不可欠の能力だと思います。Leader（リーダー）の L は Listen（聴く）の L です。E は Explain（説明する）の E。A は Assist（支援する）。D は Discuss（議論する）。つぎの E は Empower（その人の持っている力を発揮できるようにする）。R は Response（応答する）です。人の意見、とくに耳の痛い意見をよく聴いて、自分の目標と達成への道を具体的に説明する。その上で、自分がシュートを打って目立つことばかり考えるのではなく、チームの構成員がシュートを打ちやすいようにアシストし、方略をしっかり議論しながら、部下たちの力を発揮しやすいように場を整え、次世代を育てる。以上の応答できる能力がそろってはじめてリーダーになれます。そう、応答できる力こそが、Responsibility すなわち「責任感」です。

ちなみに、「聴く」は、耳から真っ直ぐはいつてきた情報を心でしっかり受け止め

ること。勝手に耳に入ってくることを表す「聞く」でも、答えを予め持っていて思い通りの答えをきこうとする「訊く」でもありません。正解を知っていると思っている教員は、しばしば正解に迷う子どもたちに「訊く」態度をとることがあります。それは訊問であって、「対話」ではありません。先入観なしに「君の思いを聴かせてよ」という姿勢からしか良い授業は生まれませんし、リーダーたる教師も育ちません。

広く多様な意見やしんどい思いを聴かない、メリットもデメリットもきちんと具体的に説明しない、そんなリーダーが前に立つと、教室も、学校も、会社組織も、地域社会も、そして国家も、迷走を始めます。リーダーすなわち指導者には、目標を指さして、後ろに従う者たちの安心・安全を図りながら導いていく「指導」の能力が必須です。そうして、後ろを振り返りながら、ついてくる人たちに心を差し出す。この、後ろを顧みて心を差し出す姿を象形した文字こそが「愛」だと白川静さんは言います（『字統』）。コロナ禍以降の世の中に、「愛」を体現できるリーダーが輩出してくる社会をともにつくりたいものだと思います。